

2023 年度 教育課程

專 門 分 野 (基礎)

専 門 分 野

位 置 づ け

本分野は、基礎分野、専門基礎分野で得た知識・技術・態度を活用し、あらゆる健康レベル、あらゆる発達段階にある対象の看護の必要性を判断し、あらゆる医療活動の場においても、適切な方法で看護を実践するための基礎的知識・技術・態度を養うための領域として位置づける。

目 的

あらゆる健康レベル、あらゆる発達段階にある対象特性に応じて、看護の必要性を判断し、あらゆる場の状況に応じて、適切な方法で看護を実践するための看護実践能力を習得する。

基礎看護学

構築の考え方

基礎看護学は、学生が看護について理解を深め、看護の専門性を追求するとともに、創造的・発展的に物事を考えられるような基礎的能力を養う領域として位置づける。

少子高齢化の問題、国民の健康に対する意識の高まり、また経済的な問題を背景に医療改革が進み、これに合わせて看護師の果たす役割・機能の拡大が顕著となり、その真価が問われる時代となった。看護師には、療養生活支援の専門家として、的確な判断と適切な看護技術の提供が求められている。

そこで基礎看護学においては、対象が必要とする看護の根拠を、看護理論や看護技術とのつながりの中で理解するとともに、看護師としての倫理観を培い、高度な看護実践の遂行に役立つ知識・技術、判断能力および調整能力を養う必要がある。

基礎看護学は、対象である人間と人間の生活についての理解が基盤となる。しかし、学習者の生活体験の乏しさに加え、日常生活の自立度が年々低下している。また、看護師は自ら考え、判断し、行動する能力が求められる。そこで、学生が強い関心と意欲をもって、能動的・主体的な学習に臨めるような工夫が必要となっている。

さらに現代は、医療の高度化・専門化が進む一方で、医療機関の入院期間は短縮し、重度な要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らすことを可能とする地域包括ケアシステムの構築が進んでいる。看護師には、対象を「生活者」の視点で捉え、場を問わず‘今・ここで’必要な看護を提供できる能力が求められている。

これらのことから、基礎看護学の授業科目は看護学概論、看護の基本となる技術Ⅰ～Ⅴ、日常生活援助技術Ⅰ～Ⅲ、健康状態別看護Ⅰ～Ⅲ、臨床判断の計15単位(375時間)ならびに看護の基礎となる施設実習Ⅰ・Ⅱ、看護実践実習、看護過程展開実習Ⅰ～Ⅲの計10単位(420時間)で構成し、合計単位数を25単位(795時間)とする。

看護学概論は、看護を学ぶ上での導入部分であり、看護の概念をとらえ、健康の社会的意義や看護の位置づけと役割の重要性について理解する。

看護の基本となる技術は、対象理解のための技術、対象に合わせた看護を実践するための看護過程展開の技術、人間関係成立のための技術、対象への教育的かわり技術について理解する。

日常生活援助技術は、健康的な日常生活行動を支援するための技術を理解・習得する。

健康状態別看護は、対象の健康障害の治療経過に合わせた看護や、診療の補助技術、対象の状態を的確に捉え、状況に合わせて判断・看護を実践する方法を理解する。

臨床判断では、「看護師が考えるように考える能力」の育成をめざし、「その時・その場」の状況に応じて、対象を観察・把握し、適切な看護を実践するための基礎的能力を養う。

看護の基礎となる施設実習Ⅰは、療養する場としての病院・病床と、療養する対象を理解するとともに、療養を支える支援者としての看護の役割と機能の概要を理解する。

看護の基礎となる施設実習Ⅱは、対象の状態や生活に気づき、コミュニケーションを図り、よりよい人間関係を構築する技術、対象の状態を把握するための観察技術を習得する。

看護実践実習は、医療を受ける対象を理解するとともに、対象の状態を把握し、対象に応じた日常生活援助技術を実践する能力を習得する。

看護過程展開実習Ⅰ～Ⅲでは、対象に応じた看護を実践するために、学習した看護過程展開の技術を適用し、問題解決技法の基礎を習得する。

基礎看護学

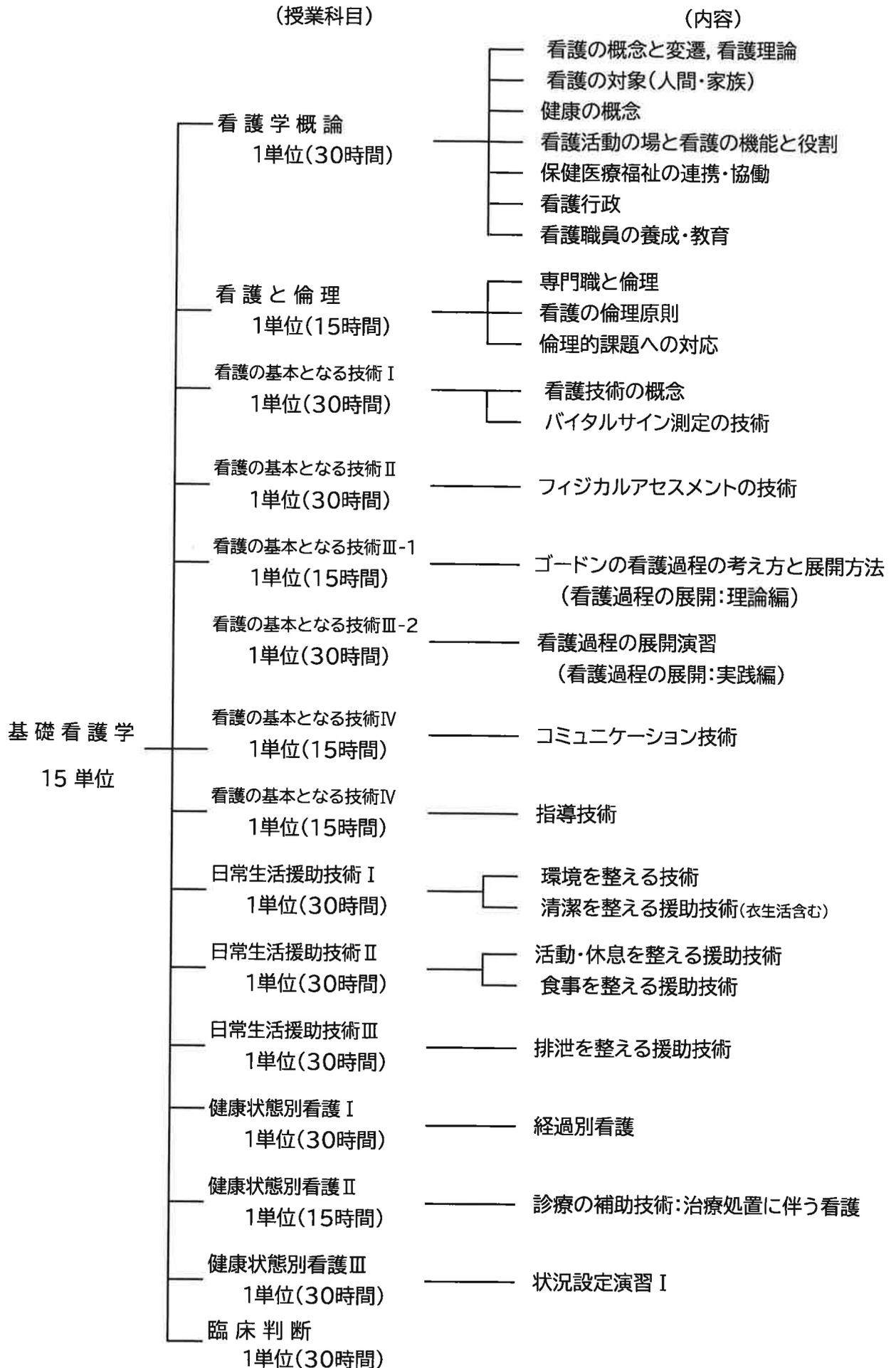
目 的

看護の対象である人間を理解し，看護実践に必要な基礎的知識・技術・態度を習得するとともに，保健医療福祉チームにおける看護の役割を理解する。

目 標

- 1 看護の対象や機能について理解するとともに，保健医療福祉の場における看護の役割の重要性を理解する。
- 2 看護実践に必要な基本的看護技術を習得する。

基礎看護学科目構造



科目名	看護学概論						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	川那子 清美 (実務経験のある教育者：看護師)						
ねらい	「看護とは何か」を概念的に捉え、健康の社会的意義、看護の位置づけと看護の機能と役割を理解する。						
回数	内 容					授業形態	
1～3回	1 看護の概念 1) 看護の語源 2) 看護の概念の変遷 3) 看護の定義 4) 看護であること・看護でないこと (ナインゲール) 2 看護の変遷 (看護の歴史) 1) 看護の起こり 2) 宗教による看護 3) 職業的看護のめばえ 4) 職業的看護 5) 看護の専門職化 (教育制度等)					講義 GW	
4～6回	3 看護理論 1) 理論の意味 (看護実践の理論知と実践知) 2) 理論の分類 (1)大理論 (2)中範囲理論 (3)小範囲理論 4 さまざまな看護理論 1) V. ヘンダーソン 2) A. ウィーデンバック 3) J. トラベルビー 4) H. ペプロー 5) S. カリスタ・ロイ 6) D. オレム					講義 GW	
7～9回	5 生活統合体としての人間 1) 人間の成長と発達 (1)成長・発達的一般的原則 (2)発達段階・発達課題 2) 環境の変化と対処機制 3) 人間の欲求：マズローの基本的欲求階層論 4) ストレスと適応 5) 疾病、障害の受容過 6 看護の対象としての家族 1) 家族の機能 (家族関係、家族形態の変化、疾病が患者・家族に与える心理社会的影響) 7 健康の概念 1) 健康の概念と健康観の変遷 (1)健康の定義 (2)健康の概念 (3)健康の位置づけ (4)障害の定義 (5)主観的健康と客観的健康 (6)健康と疾病の関係 2) 健康とその影響要因 ・生活環境・生活行動・習慣・労働						

10～12回	<p>8 看護活動の場</p> <p>1) 医療提供施設 ・病院 ・診療所 ・助産所 ・介護老人保健施設</p> <p>2) 保健所・市町村保健センター</p> <p>3) 地域・在宅 ・在宅看護・訪問看護ステーション ・介護保険施設 ・地域包括支援センター</p> <p>9 看護活動の場における看護の機能</p> <p>1) 医療施設における看護活動 ・病院における看護活動 ・保健福祉施設における看護活動 ・チーム医療における看護職の役割・活動</p> <p>10 看護の機能と役割</p> <p>1) 看護の法的規定 ・保健師・助産師・看護師・准看護師</p> <p>2) 看護師の独自機能</p> <p>3) 看護業務</p> <p>11 保健医療福祉の連携・協働</p> <p>1) 他職種との役割</p> <p>2) 他職種との連携・協働</p> <p>3) チームアプローチの概念</p>	講義 GW
13～15回 (45分)	<p>12 看護行政</p> <p>1) 看護行政の組織</p> <p>2) 看護にかかわる診療報酬</p> <p>3) 看護職員の確保</p> <p>4) 看護職員の労働環境</p> <p>13 看護職員の養成・教育</p> <p>1) 学校における看護教育</p> <p>2) 現任教育と院内教育</p> <p>3) 看護師のキャリア形成</p> <p>4) 看護職員の各種資格と活動 (認定看護師・専門看護師・特定行為研修制度等)</p> <p>5) これからの看護教育</p>	講義 GW
(45分)		試験
評価方法及び観点	筆記試験 } レポート } GW } 等総合的に評価する。	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学① 看護学概論 (医学書院) V. ハンダーソン 看護の基本となるもの F. ナイナゲル 看護覚え書き	
参考資料	授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の留意事項	・サブテキスト等を予習(読んで出席)するような指示が出るので、指示されたことに対しては誠実に取り組むこと。 ・グループワークを複数回実施するので、積極的に参加すること。 ・課題レポート等は提出期限を厳守のうえ、表紙をつけて提出すること。	

科目名	看護と倫理						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15時間)	対象 年次	2年
担当者名	川那子 清美 (実務経験のある教育者：看護師)						
ねらい	職業倫理としての看護倫理と、倫理的看護実践のための倫理原則・倫理概念を理解し、倫理的感受性を培い、基本的倫理観を養う。						
回数	内 容					授業形態	
1回	1 看護倫理を学ぶ意義 2 専門職と職業倫理 (看護倫理) 看護職の倫理綱領					講義	
2回	3 看護の倫理原則						
3回	4 看護実践上の倫理概念						
4回	5 倫理的感受性と倫理的看護実践						
5～7回	6 倫理的課題と倫理的ジレンマ 倫理的課題発見 倫理的課題に対する対応					講義 GW	
(45分)						試験	
評価方法及び観点	筆記試験 GWへの参加度 個人ワーク レポート } 総合的に評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門 I 基礎看護学① 看護学概論 (医学書院) 別巻 看護倫理 (医学書院)						
参考資料	・講義に必要な資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・看護職の倫理について深く考え、積極的に探究する姿勢を望む。・グループワークで意見交換をおこなうので、積極的に参加すること。						

科目名	看護の基本となる技術 I (バイタルサイン)						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30 時間)	対象 年次	1 年
担当者名	早瀬 恵子 (実務経験のある教育者：看護師)						
ねらい	対象の状態を把握するための観察技術並びに対象の生命徴候を把握するためのバイタルサインを正しく測定する技術を習得する。						
回数	内 容						授業形態
1 回 (45 分)	1 看護技術の概念 1) 技術の意味 2) 技術の種類・分類 3) 技術の成立過程 4) 技術の身につけ方						講義
2～4回	2 看護におけるヘルスアセスメント 3 フィジカルアセスメントの技術 1) フィジカルアセスメント基本技術 2) フィジカルイグザミネーションの基本技術 ①問診 ②視診 ③触診 ④打診 ⑤聴診						
5回	胸部の聴診						技術練習
6～10回	4 バイタルサイン 1) バイタルサインの定義 2) バイタルサインの目的・意義 3) バイタルサインの観察とアセスメント 5 バイタルサインのアセスメント 1) 体温のアセスメント 2) 脈拍のアセスメント 3) 血圧のアセスメント 4) 呼吸のアセスメント 5) 意識状態のアセスメント						講義
11・12回	バイタルサインの測定						技術練習
13・14回	バイタルサインの測定 (瞳孔・意識レベルの観察含む)						演習
15回 (45分)	6 身体計測 1) 体格 2) 運動機能						講義 試験
評価方法	筆記試験で評価する。						
必須資料 (テキスト)	系統看護学 専門 I 基礎看護学② 基礎看護技術 I (医学書院) 看護が見える③ フィジカルアセスメント (メディックメディア) 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 (医学書院)						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・サブテキスト等を予習 (読んで出席) するような指示が出た場合は、指示されたことに対して、誠実に取り組み、必ず指示を厳守すること。 ・看護技術の演習には、講義で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨むこと。 ・講義内で技術練習時間を設けているが、主体的に各自練習をすること。 ・演習時間は限られているので、主体的に参加することを臨む。また、わからないことは、練習時間や演習時に担当教員に積極的に質問し、技術習得に努めること。 						

科目名	看護の基本となる技術Ⅱ（フィジカルアセスメント）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30時間)	対象 年次	1年
担当者名	稲葉 奈緒美（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	対象の状態を把握するためのフィジカルアセスメントと、看護に活かすためのフィジカルアセスメント技術を習得する。						
回数							授業形態
1～3回	1 系統的なフィジカルアセスメントと看護 1) 呼吸に関連する症状を示す対象への看護 (1) 呼吸器のフィジカルアセスメント (2) 呼吸機能障害に関連する症状のメカニズム 低酸素血症・高炭酸ガス血症・呼吸困難・咳嗽・喀痰 チアノーゼ (3) 呼吸機能障害に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 呼吸機能障害に関連する看護上のニーズ充足に向けた看護援助 ① 酸素療法 ② 肺痰ケア：体位ドレナージ						講義
4～6回	2) 循環に関連する症状を示す対象への看護 (1) 循環器系のフィジカルアセスメント (2) 循環障害に関連する症状のメカニズム 胸痛・易疲労感・動悸・不整脈・失神・ショック・浮腫・血圧異常 (3) 循環障害に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 循環障害に関連するニーズ充足に向けた看護援助 ① 腓腹筋の収縮運動						講義
7回	3) 栄養や代謝に関連する症状を示す対象への看護 (1) 腹部のフィジカルアセスメント (2) 栄養・代謝障害に関連する症状のメカニズム (3) 栄養・代謝障害に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 栄養・代謝障害に関連するニーズ充足に向けた看護援助 ① 咀嚼・嚥下障害 等						講義
8回	腹部のアセスメントの実際						演習
9回	4) 安楽に関連する症状を示す対象への看護 (1) 筋・骨格系のフィジカルアセスメント (2) 安楽に関連する症状のメカニズム (3) 安楽に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 安楽に関連するニーズ充足に向けた看護援助 ①疼痛 ②嘔気・嘔吐 ③ポジショニング						講義

10回	MMT ROM 弾性ストッキング装着	演習
11・12回	5) 認知や知覚に関連する症状を示す対象への看護 (1) 神経系・感覚器のアセスメント (2) 認知や知覚に関連する症状のアセスメント (3) 認知や知覚に関連する看護上のニーズ判別のためのアセスメント (4) 認知・感覚機能障害に関連するニーズ充足に向けた看護援助	講義
13・14回 (45分)	6) 乳房・腋窩のフィジカルアセスメント 7) 外皮系のフィジカルアセスメント	
15回	8) 心理・社会状態のアセスメント	
(45分)		試験
評価方法及び観点	筆記試験・レポートで評価する。	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ (医学書院) 系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学④ 臨床看護総論 (医学書院) 看護が見える フィジカルアセスメント (メディックメディア) 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 (医学書院)	
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の留意事項	・サブテキスト等を予習(読んで出席)するような指示が出た場合は、指示されたことに対して、誠実に取り組み、必ず指示を厳守すること。 ・看護技術の演習に、授業で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨むこと。 ・講義内で技術練習時間を設けているが、各自練習して臨むこと。 ・練習時間は限られているので、主体的に参加することを臨む。	

科目名	看護の基本となる技術Ⅲ-1（看護過程の展開：理論編）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15時間)	対象 年次	2年
担当者名	高松 理絵（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	看護の基本となる科学的根拠に基づく看護を実践する能力を習得するため、看護過程の考え方とアセスメントの枠組みのゴードンの機能的健康パターンを理解する。						
回数	内 容						授業形態
1回	1 看護過程とは 1) 構成要素 2) 構成要素の関係性 3) 看護過程を用いることの利点						講義 演習
2回	2 看護過程の基盤となる考え方 1) 問題解決過程 2) クリティカルシンキング 3) リフレクション 4) 問題志向型システム 5) 臨床推論と臨床判断 6) 臨床判断モデル						
3回	3 代表的なアセスメントの枠組みと看護理論 4 看護過程の各段階 1) アセスメント 2) 看護問題の明確化（看護診断） 3) 計画 4) 実施 5) 評価						
4～6回	5 ゴードンの機能的健康パターンに基づくアセスメントの枠組みの理解 (1)健康知覚・健康管理パターン (2)栄養-代謝パターン (3)排泄パターン (4)活動-運動パターン (5)睡眠-休息パターン (6)認知-知覚パターン (7)自己知覚-自己概念パターン (8)役割-関係パターン (9)セクシュアリティ-生殖パターン (10)コーピング-ストレス耐性パターン (11)価値-信念パターン						
7回	6 看護記録						
(45分)							講義 試験
評価方法及び観点	筆記試験 GW 課題の提出状況・内容レポート } 総合的に評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ（医学書院） ゴードンの機能的健康パターンに基づく看護過程と看護診断（ヌーヴェルヒロカワ） ゴードンの看護診断マニュアル（医学書院） 看護過程に沿った対症看護（学研）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・事例をもとにした看護過程の展開は、期日を指示した課題提出の提出状況及び内容も評価に加味する。 ・事例展開は、理解を深めるために実施するので、各自が「考える」ことを重視す。 ・事例展開の際は、配布された授業資料等も参考に「考える」作業に取り組むこと。 ・演習には積極的な参加を期待する。						

科目名	看護の基本となる技術Ⅲ-2（看護過程の展開：実践編）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30時間)	対象 年次	2年
担当者名	高松 理絵（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	ゴードンの機能的健康パターンの考え方の理解をもとに、事例をとおして、看護の基本となる科学的根拠に基づく看護を実践するための看護過程展開能力を習得する。						
回数	内 容						授業形態
1～9回	事例に基づく看護過程の展開演習 1 情報の収集 2 情報の整理・分類 ゴードンの健康的機能パターンへの分類 3 情報の文責・解釈・判断 (1)健康知覚・健康管理パターン (2)栄養-代謝パターン (3)排泄パターン (4)活動-運動パターン (5)睡眠-休息パターン (6)認知-知覚パターン (7)自己知覚-自己概念パターン (8)役割-関係パターン (9)セクシアリティー生殖パターン (10)コーピング-ストレス耐性パターン (11)価値-信念パターン						講義 個人ワーク 演習 GW
10・11回	4 看護問題の明確化（看護診断） 1) 看護診断と共同問題 2) 看護診断の種類 3) 優先順位						個人ワーク GW 講義
12・13回	5 看護計画 1) 目標・成果・成果指標の設定 2) 具体策の立案						
14・15回	6 計画の実施 1) 実施したことの記録（対象の反応と結果の記載） 7 評価 1) 評価の考え方・書き方 2) 日々の看護実践の評価 3) 看護診断に対する評価 8 看護過程のまとめ						
評価方法及び観点	GWへの参加状況 課題への取り組み姿勢 課題の提出状況・内容 レポートの内容						総合的に評価する。
必須資料 (テキスト等)	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ（医学書院）ゴードンの機能的健康パターンに基づく看護過程と看護診断（ヌーヴェルヒロカワ）ゴードンの看護診断マニュアル（医学書院）看護過程に沿った対症看護（学研）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・事例をもとにした看護過程の展開は、期日を指示した課題提出の提出状況及び内容も評価に加味する。 ・事例展開は、理解を深めるために実施するので、各自が「考える」ことを重視す。 ・事例展開の際は、配布された授業資料等も参考に「考える」作業に取り組むこと。 ・演習には積極的な参加を期待する。						

科目名	看護の基本となる技術Ⅳ（接遇・コミュニケーション技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15時間)	対象 年次	1年
担当者名	鯉淵 久子（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	看護実践の基礎となる良好な人間関係構築のための接遇や、技術としてのコミュニケーションを理解する。						
回数	内 容						授業形態
1回	1 看護・医療におけるコミュニケーション 1) 人間にとってのコミュニケーションの意義 2) 看護・医療におけるコミュニケーションの目的と特徴 3) 看護・医療におけるコミュニケーションの重要性 2 関係構築のためのコミュニケーションの基本 1) 接近的コミュニケーションの基本となる態度 (1) あいさつ (2) 身だしなみ (3) 言葉遣い (4) 立ち居振る舞い・視線						講義 GW
2・3回	看護としての接遇						演習
4回	2) 接近的行動と非接近的行動 3) 効果的なコミュニケーションの実際 (1) 傾聴の技術 (2) 情報収集の技術 (3) 説明の技術 (4) アサーティブネス						講義 GW
5・6回	意図的なコミュニケーション (聴きたいこと・知りたいことを気持ちよく尋ねる)						演習 ロールプレイ
7回	3 コミュニケーションに障害がある対象への対応 1) 言語的コミュニケーションに必要な身体機能 2) コミュニケーション障害のある対象への対応						講義
(45分)							試験
評価方法及び観点	筆記試験 GW・演習への参加態度 レポート課題						総合的に評価する。
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学① 看護学概論（医学書院） 看護のための教育学（医学書院） 看護コミュニケーション（第2版）（医学書院） 医療接遇とコミュニケーション（日本看護学校協議会共済会）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・コミュニケーションの授業のGWには積極的に参加する姿勢を望む。・コミュニケーション技術は「心理学」「人間関係論」の予習・復習をして臨む。						

科目名	看護の基本となる技術V（指導技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15時間)	対象 年次	2年
担当者名	鯉淵 久子（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	対象の健康の保持・増進や健康の回復並びに疾病の予防のためにおこなう教育・指導技術を理解する。						
回数	内 容						授業形態
1・2回	1 看護における学習支援 1) 看護における学習支援とは何か 2) 看護師の役割としての学習支援 2 健康に生きることを支える学習支援 3 学習支援に活用される健康行動理論 1) コンプライアンスとアドヒアランス 2) 健康行動の理論計画的行動理論 3) 健康信念モデル（ヘルス・ビリーフ・モデル） 4) 自己効力感（セルフ・エフィカシー） 5) 社会的支援（ソーシャルサポート） 6) 変容変化のステージモデル 7) ストレスとコーピング 8) コントロール所在						講義
3回	3 学習支援の進め方 1) 学習ニーズのアセスメント 2) 指導計画と実施 (1)指導計画書の作成 (2)個別指導と集団指導 (3)指導方法と指導用具						
4・5回	4 学習支援の実際 1) 指導計画の立案						GW
6・7回	2) 指導の実際 3) 評価						演習 ロールプレイ
(45分)							試験
評価方法及び観点	筆記試験 GW・演習への参加態度 レポート課題						総合的に評価する。
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学① 看護学概論（医学書院） 看護のための教育学（医学書院） <参考図書> 中範囲理論入門（日総研）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・基礎分野「教育学」を復習して臨む。 ・指導計画を立て、ロールプレイで実践してもらうので、積極的な参加姿勢を望む。						

科目名	日常生活援助技術Ⅰ（環境を整える・清潔を整える技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30時間)	対象 年次	1年
担当者名	池田 直美（実務経験のある教育者：看護師） 上田 麻衣子（ “ ” ）						
ねらい	健康の保持・増進や疾病の回復に向けて、日常生活行動（環境調整・清潔）の援助を実施するための基礎的知識と技術を習得する。						
回数	内 容						授業形態
<環境> 1・2回	I 環境を調整する技術 1 援助の基礎知識 1) 人と環境 2) 療養生活と環境 3) 生活環境の調整 2 病室と環境の調整 1) 病室・病床の選択 2) 温度・湿度 3) 光と音 4) 色彩 5) 空気の清浄とにおい 6) 人的環境 3 援助の実際 1) ベッド周囲の環境 2) 病床を整える技術 (1) マットレス・枕の条件 (2) ベッドメイキング (3) リネン交換						講義
3回	臥床患者のリネン交換						技術練習
4回	臥床患者のリネン交換						演習
<清潔> 1回	II 清潔の援助技術 1 清潔の援助の基礎知識 1) 皮膚・粘膜・口腔内の構造と機能 2) 清潔援助の効果 3) 患者の状態に応じた援助選択の視点と留意点 2 清潔援助の実際 1) 入浴・シャワー浴 2) 部分浴：手・足浴						講義
2回	足浴						技術練習
3回	足浴						演習
4回	3) 洗髪 4) 整容 5) 口腔ケア						講義
5・6回	洗髪と整容						演習
7回	6) 全身清拭 7) 陰部洗浄 3 衣生活の援助 1) 衣服の援助の基礎知識 (1) 意義 (2) 熱産生と熱放散・衣服気候・衣服のニーズ 2) 病衣・寝衣の交換の実際						講義

8・9回 (45分)	全身清拭と寝衣交換	技術練習
10・11回 (45分)	全身清拭と寝衣交換	演習 試験
評価方法 及び観点	筆記試験で評価する。	
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ (医学書院) 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 (医学書院)	
参考資料	授業資料は適宜印刷して配布する。	
履修上の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・看護技術の演習には、講義で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨む。 ・技術練習前には指定のDVD学習のうえ、主体的に臨む。さらに、演習で確認したい課題を明確にする。 ・演習時間内に実施できない場合は、自己学習時間で練習を行う。 ・積極的に授業及び演習に参加し、技術の修得に努める。 	

科目名	日常生活援助技術Ⅱ（排泄を整える技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30時間)	対象 年次	1年
担当者名	皆川 かおり（実務経験のある教育者：看護師）						
ねらい	健康の保持・増進や疾病の回復に向けて，日常生活行動（排泄）の援助を実施するための基礎的知識と技術を習得する。						
回数	内 容						授業形態
1回	1 人間にとっての排泄 2 排泄のイメージと看護師に求められる基本姿勢 3 排泄のメカニズム 4 排泄に影響を及ぼす因子 5 排泄の観察とアセスメント						講義
2回	6 トイレにおける排泄の介助 7 床上排泄の援助						
3・4回	尿器・便器の取扱い 尿器便器を用いた排泄の援助						演習 技術練習
5回	8 オムツによる排泄の援助 1) 床上排泄の対象理解 2) 失禁のある対象理解						講義
6・7回	陰部洗浄とオムツ交換						演習
8・9回	陰部洗浄とオムツ交換（下衣交換含む）						技術練習
10回	9 排便障害のある対象の援助 1) 便秘改善のための看護援助 2) 浣腸・摘便						講義
11・12回 (45分)	浣腸						演習
13回	10 排尿障害のある対象の援助 1) 排尿障害のメカニズム 2) 排尿障害への援助：一次的導尿と持続的導尿 3) 持続的導尿の管理						講義
14・15回 (45分)	一次的導尿						演習
(45分)							試験
評価方法及び観点	筆記試験で評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 根拠と事故防止から見た基礎・臨床看護技術（医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・看護技術の演習には，講義で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨む。 ・演習・技術練習前には指定のDVD学習のうえ、主体的に臨む。さらに、演習で確認したい課題を明確にしたうえで臨むこと。 ・演習時間内に実施できない場合は，自己学習時間で練習を行う。 ・積極的に授業及び演習に参加し、技術の修得に努める。 						

科目名	日常生活援助技術Ⅲ（活動・休息を整える技術，食事を整える技術）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30時間)	対象 年次	1年
担当者名	半村 博美（実務経験のある授業科目：看護師） 稲葉 奈緒美（実務経験のある教育者）						
ねらい	健康の保持・増進や疾病の回復に向けて，日常生活行動（活動・食事）の援助を実施するための基礎的知識と技術を習得する。						
回数	内 容					授業形態	
<活動休息> 1回	I 活動・休息を整える看護技術 1 活動と休息の意義					講義	
2・3回	2 活動への援助：ボディメカクス・体位変換の技術					DVD学習	
4回	3 苦痛の緩和・安楽の確保の技術 罨法					講義	
5回	4 創傷管理技術：褥創の予防 包帯法						
6回	5 運動機能の低下した対象への援助技術					デモンストレーション	
7～9回 (45分)	6 体位変換 移乗・移送・歩行の介助 の実際					演習	
10回	7 睡眠・休息の援助					講義	
<食事> 1回	II 食事を整える看護技術 1 食事援助の基礎知識					講義	
2回	2 食事摂取の介助						
3回	3 食事摂取の介助の実際					演習	
4回	4 非経口的栄養摂取の援助					講義	
5回	5 非経口的栄養摂取の援助の実際 - 経管栄養法 -					演習	
(45分)						試験	
評価方法及び観点	筆記試験で評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 根拠と事故防止から見た基礎・臨床看護技術（医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・看護技術の演習には，講義で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨む。 ・技術練習前には指定のDVD学習のうえ、主体的に臨む。さらに、演習で確認したい課題を明確にする。 ・演習時間内に実施できない場合は，自己学習時間で練習を行う。 ・積極的に授業及び演習に参加し、技術の修得に努める。						

科目名	健康状態別看護Ⅰ（経過別看護）						
科目区分	専門	必修区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30時間)	対象 年次	2年
担当者名	坂寄 久美子（実務経験のある授業科目：看護師） 松下 久美子（実務経験のある授業科目：看護師） 本校職員						
ねらい	健康障害の経過に伴って生じる対象の身体的・心理的・社会的特徴を理解するとともに、健康回復に向けた医療の経過に応じた看護を理解する。また、対象の年齢による特徴を踏まえた健康障害の経過に応じた看護を理解する。						
回数	内 容					授業形態	
急性期 1回	1 急性期における看護 1) 急性期とは (1) 急性期の特徴 (2) 急性期の患者のニーズ (3) 急性期にある患者への援助					講義	
2・3回	2 周術期の看護 1) 手術療法の看護と目的 2) 手術療法による生体侵襲と侵襲刺激に対する生体反応 3) 手術前の看護 4) 手術中の看護 5) 手術後の看護 6) 周術期における対象別看護 (1)小児の周術期看護 (2)高齢者の周術期看護						
4回	3 集中治療看護 1) 集中治療・看護の役割 2) 集中治療室における看護の実際						
回復期 1回	4 リハビリテーション期の看護 1) リハビリテーション期とは 2) リハビリテーション医療の特徴 3) リハビリテーション期の患者のニーズ (1)ICFによる障害の分類 (2)障害受容のプロセス (3)障害受容への影響因子 (4)身体的ニーズ 身体可動性障害とセルフケア不足生活再構築へのニーズ (5)心理的ニーズ 自己概念の混乱, 自己尊重に対するニーズ (6)社会的ニーズ					講義	
2・3回 (45分)	4) リハビリテーション期にある対象と家族への看護 (1)身体可動性障害とセルフケア不足に対する援助 (2)心理・社会的な援助 障害受容への援助（障害の受容過程に応じた支援） (3)生活の再構築に向けた援助					講義 GW	

4回	<p>5) 退院支援の援助技術</p> <p>(1)療養の場の移行に伴う看護援助の必要性</p> <p>(2)退院支援の実際</p> <p>(3)退院支援活動</p> <p>6) リハビリテーション期における対象別看護</p> <p>(1)小児のリハビリテーション期看護</p> <p>(2)高齢者のリハビリテーション期看護</p>	講義
慢性期 1回	<p>5 慢性期の看護</p> <p>1) 慢性期とは</p> <p>2) 慢性期治療の特徴</p> <p>(1)病とともに生きる対象と家族</p> <p>(2)生活習慣・ライフスタイルの変更・調整</p> <p>3) 慢性期の経過をとらえる視点</p> <p>4) 慢性期の患者のニーズ</p> <p>(1)セルフケア</p> <p>(2)健康障害を受容すること</p> <p>(3)自分らしく生きること</p>	講義
2・3回	<p>5) 慢性期にある対象への援助</p> <p>(1)セルフケア獲得に向けた支援</p> <p>(2)セルフケア行動継続への支援</p> <p>(3)セルフケアに適した環境の調整</p> <p>(4)社会的支援の獲得への援助</p> <p>(1)家族・患者会への支援</p> <p>(2)特定疾患治療研究事業の適用</p> <p>(3)社会資源の活用</p> <p>6) 慢性期における対象別看護</p> <p>(1)小児の慢性期看護</p> <p>(2)成人の慢性期看護</p> <p>(3)高齢者の慢性期看護</p>	講義 GW
終末期 1回	<p>5 終末期の看護</p> <p>1) 終末期とは</p> <p>2) 終末期医療の特徴と現状</p> <p>3) 終末期の患者と家族のニーズ</p> <p>(1)身体的ニーズ</p> <p>疼痛のメカニズムと疼痛コントロール</p> <p>(2)心理的・社会的ニーズ</p> <p>全人的苦痛（トータルペイン）</p> <p>(3)社会的ニーズ</p> <p>(4)自分らしく生き抜く</p> <p>(5)満足ゆく看取りへのニーズ</p>	講義
2回	<p>4) 終末期にある対象への援助</p> <p>(1)エンドオブライフケア</p> <p>(2)状態に合わせた日常生活の援助</p> <p>(3)症状に関する苦痛への援助</p> <p>(1)症状のメカニズムと症状マネジメント</p> <p>(2)疼痛コントロール</p> <p>(3)ACP:アドバンスケアプランニング</p> <p>(4)心理的安寧への援助</p>	

科目名	健康状態別看護Ⅱ（診療の補助技術：治療処置に伴う看護）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (15時間)	対象 年次	2年
担当者名	本校職員（実務経験のある教育者）						
ねらい	健康障害や診察・治療の経過に応じた対象の特徴を理解し、回復の促進に向けて、それらに応じた看護が実践できる基礎的知識を理解する。また、対象の診察・検査・治療の意義や目的を理解し、それらに伴う対象への看護技術を習得する。						
回数	内 容						授業形態
1回	1 診察・検査・処置における技術 1) 診察の介助の目的 2) 診察時の看護師の役割 3) 診察時の体位と介助 2 検査の特徴と理解 1) 検体の採取とその取扱い ①血液検査 ②尿検査 ③便検査 ④喀痰検査						講義
2回	真空採血管を用いた静脈血採血						演習
3回	2) 検査に伴う看護 ①X線検査 ②コンピュータ断層撮影 (CT) ③磁気共鳴画像 (MRT) ④内視鏡検査：上・下部消化管 ⑤超音波検査 (エコー検査) ⑥心電図検査 ⑦核医学検査 3 生体情報のモニタリング 1) 生体情報のモニタリングの意義 ①心電図モニター ②Spo2モニター(パルスオキシメーター) ③血管留置カテテルモニター						講義
4～5回	4 穿刺・洗浄の意義と理解 1) 穿刺の意義 2) 穿刺の種類 ①胸腔穿刺 ②腹腔穿刺 ③腰椎穿刺 ④骨髄穿刺						
6回	3) 洗浄の意義 4) 洗浄の種類 ①胃洗浄 ②気管支洗浄						
7回	5 創傷治癒の看護 1) 創傷治癒の経過・促進 ①創傷治癒のための環境づくり ②創傷処置 (創洗浄・創保護) 2) ドレーンの管理 ①ドレーン創の処置 ②テープによる皮膚障害 (テープ固定)						試験
(45分)							
評価方法	筆記試験で評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ (医学書院) 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 (医学書院)						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の 留意事項	・看護技術の演習には、講義で使用した資料やテキストの該当箇所を復習して臨む。 ・演習前には指定のDVD学習のうえ、主体的に臨む。さらに、演習で確認したい課題を明確にしたうえで演習に臨むこと。 ・演習時間内に実施できない場合は、自己学習時間で練習を行う。 ・積極的に授業及び演習に参加し、技術の修得に努める。”						

科目名	健康状態別看護Ⅲ（状況設定演習Ⅰ）						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30時間)	対象 年次	2年
担当者名	本校職員（実務経験のある教育者）						
ねらい	既習知識を統合し、対象の状態に応じた援助を実践する基礎的能力を習得する。						
回数	内 容						授業形態
1回	1 複数の看護技術を統合した実践 1) 事例をもとに、健康障害をもつ対象の療養生活上のニーズを把握し、既習知識と技術及び倫理的態度を踏まえて対象に適した援助を実践・評価する。 (1) 疾患・障害をもつ対象者の情報収集とアセスメント						講義 GW
2～5回	(2) 看護上の問題と看護計画						
6～11回	計画に基づく実践練習（タスクトレーニング）						技術練習
12～14回	(3) 援助の実施 環境・スクリーニング・フィジカルアセスメント・清潔・排泄・活動・コミュニケーションの各技術の中から、複数技術を組み合わせた援助を実践する。 *実施した援助の報告と記録を含む。 (自己の実践の振り返り)						技術試験
15回	(4) 評価						講義
評価方法及び観点	レポート課題と技術試験で評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学② 基礎看護技術Ⅰ（医学書院） 系統看護学 専門Ⅰ 基礎看護学③ 基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術（医学書院）						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークや技術試験に向けた技術練習には積極的な授業姿勢と望む。 ・実習前には技術試験を課す。 不合格の場合には、自己練習のうえ、合格するまで再試験を課す。（合格のうえで実習には臨ませることとする。 ・課題レポート等は提出期限を厳守のうえ、表紙をつけて提出すること。 						

科目名	臨床判断						
科目区分	専門	必修 区分	必修	単位数 (時間数)	1 (30時間)	対象 年次	1年
担当者名	山崎 紀久子 (実務経験のある教育者)						
ねらい	看護師のように考えることをめざし、臨床での「気づき・解釈」を実践につなげていく思考過程を習得する。						
回数	内 容					授業形態	
1回 (45分)	1 臨床判断とは					講義	
2～5回	2 症状別看護 1) 呼吸困難					講義 映像レク GW	
6～9回	2) 頭痛・腹痛						
10～13回	3) 発熱・胸痛						
14・15回	事例を用いた演習						
(45分)						試験	
評価方法及び観点	筆記試験とパフォーマンス課題で評価する。						
必須資料 (テキスト等)	系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護学④ 臨床看護総論 (医学書院) 系統看護学講座 専門Ⅱ 成人看護学① 成人看護学総論 (医学書院) 系統看護学講座 専門Ⅱ 成人看護学② 呼吸器 (医学書院) 系統看護学講座 専門Ⅱ 成人看護学③ 循環器 (医学書院) 系統看護学講座 専門Ⅱ 成人看護学⑤ 消化器 (医学書院) 症状別看護過程 (医学書院)						
参考資料	・授業資料は適宜印刷して配布する。						
履修上の留意事項	・DVD 学習や調べ学習等を指示するので、必ず指示されたことを厳守のうえで授業に臨むこと。 ・グループでの課題もあるため、主体的に参加すること。 ・演習やグループワークには積極的な参加姿勢を望む。						